

## 第66回埼玉県美術展覧会審査評

### 【第6部 写真】

審査主任 ほうりき 宝力 みわ 美和

今年の応募は昨年を30点上回り1,324点で入選作品は455点、34.4%の入選率となりました。

9人の審査員で公正に審査を行い、入賞候補作品については意見を出し合い、14点の入賞作品を決定致しました。連続受賞の方も3人おり、その実力の高さを示していたと思います。

写真はデジタルカメラ技術の向上で簡単に美しく撮れるようにはなりましたが、どこかで見たことのあるような写真ではなく、オリジナリティのある作品を期待します。そして、デジタルの弊害となるやりすぎた作業で画面を壊すことのないように気をつけてください。シャッターを押した時のイメージを大切に。

また、今年もパネルから写真がずれるという不備が少なからず見られました。パネル全体が作品ですので、写真をパネルにしっかり貼るようになっています。

残念ながら規格外のため受付できなかった作品も複数ありましたが、要項をよく読んで、ぜひ来年応募してください。心のこもった作品をお待ちしています。

#### ・埼玉県知事賞

せきしゅう 「惜秋」 たなか 田中 たかこ 高子

季節を取り上げたオーソドックスなテーマを新しいセンスで切り取り、4枚の場面で表現しています。

横長の画面構成が和の雰囲気に効果的です。光をうまく捉え、木々の姿を美しく見せて、最後の秋を惜しむ気持ちをしっかり伝えているところに、作者のものを見る姿勢が感じられます。

・埼玉県議会議長賞

「<sup>あか</sup>赤の<sup>くうかん</sup>空間」 <sup>こばやし</sup>小林 <sup>しんいち</sup>伸一

目を引く赤と黄色の配色と人物のシルエットが印象的な画面を作り出しています。この赤い空間にどのような思いが込められているのだろうか、様々な想像が沸き起こります。

幻想的でもあり異様でもあり、面白くドラマチックな空間を演出することができました。

・埼玉県教育委員会教育長賞

「<sup>く</sup>暮れゆく<sup>みずべ</sup>水辺」 <sup>やまもと</sup>山本 <sup>こういち</sup>孝一

とても雰囲気のある作品です。静かな水辺の様子をモチーフを変え、美しくしっかり捉え、3枚にまとめていますが、目に映るもの以上に何かがあるように感じられました。

「暮れゆく水辺」と題していますが、暮れてまた、新しい世界が生まれていくようです。

・埼玉県美術家協会賞

「<sup>ぼうきょう</sup>望郷」 <sup>さいとう</sup>齋藤 <sup>えいいち</sup>榮一

無駄の無いシンプルな画面によりゴリラの心の動きをうまく切り取っています。それぞれの目線に意味をもたせ、中央の写真は格子の柵を入れることにより、自由でないもどかしさが伝わってきます。

表現しようとした作者の優しい目線が光っていると感じました。

・埼玉県美術家協会賞

「<sup>はいおく</sup>廃憶」 <sup>さいとう</sup>齋藤 <sup>ひでお</sup>英雄

<sup>こんにち</sup>今日の生活の中で物を大切にするという風潮が失われつつあります。

捨てられたものに込められた思いを拾うと共に、現代社会への警鐘を鳴らしているかのようにも感じる作品です。撮影・仕上げ共に、とても丁寧に行っていて、優れた技術力があると思いました。

・埼玉県美術家協会賞

「かなた彼方へ」 さと佐藤 ひろこ博子

彼方へ…広大な空間の中を走るトラックは、どこへ向かって行くのでしょうか。色調の違う 3 枚を組み合わせ、非現実を思わせる世界を作り出しています。特に真ん中の写真に魅かれました。

見知らぬ世界へ連れて行ってくれるようです。

・埼玉県美術家協会賞

「まんいんおんれい満員御礼」 やなぎ柳 みつお光雄

フクロウの兄弟たちでしょうか、まさに「満員御礼」の並んだ瞬間をカメラに収めることができました。1羽だけこちらにお尻を向けているのも面白い。二股の木やバックのグリーンも兄弟たちを引き立てています。

柔らかい光の中の幸せを感じさせる作品です。

・さいたま市長賞

「ふゆ冬はじが始まる」 よしだ吉田 のぶまさ信正

雪が降り始め、これから厳しい季節が来るのですが、そんな厳しさを忘れさせてくれるような、ほっこりした優しい風合いを感じる作品です。真っ白に色が消えていく前の時を、身近な風景の中に納めました。

そのグラデーションを静かに楽しみたいと思います。

・さいたま市教育委員会教育長賞

「はる春よいの宵」 あらい新井 ふさこ房子

星空を入れて桜を撮るには、晴天の夜で無風、振動がないなどの条件が必要です。作者は、山里の水際の残雪の中に立つ幻想的な桜を、周辺の背景をも撮り込み、ものの見事に表現しています。

高い技術力と写真への情熱がすばらしい作品となりました。

・ FM NACK5 賞

「きざまれた刻」<sup>とき</sup> はるべ せつこ  
治部 節子

古い時計の文字盤とそばに置かれた若い女性の顔写真、新旧の組み合わせが人生の物語を作っているようです。人は今まで歩いて来た人生と、これから進む人生がありますが、何があっても時は静かに流れていきます。

古く汚れた文字盤の上にも、誰にもわからない時が刻まれていきます。

・ 朝日新聞社賞

「文明が、やってきた」<sup>ぶんめい</sup> たぬま きよあき  
田沼 清昭

写真の中央に置かれたデジタルテレビがなんとも不気味に見えてきます。全く不釣り合いなその環境をも写真はいとも簡単に現在の時間の中に記録してしまうからでしょうか。

終始ダークな色調は、時間のズレを強調して効果を上げています。

・ NHK さいたま放送局賞

「最終列車」<sup>さいしゅうれつしゃ</sup> さ さ き かつお  
佐々木 勝男

この世とは思えない情景が描かれています。煙突からの煙や吹き出す蒸気、山の稜線と不釣り合いな大きい満月など、デジタル処理によって現実の光景を彼方の光景へと変え、この列車が彼岸へと導く列車にも見えてきました。

鑑賞者の見方でいかようにも世界が作れる要因を含んでいます。

・ 埼玉県美術家協会会長賞

「秋日和」<sup>あきびより</sup> すずき ひろゆき  
鈴木 浩幸

すっきりした秋空の下、何気ない日常の風景を切り取り、人生の空間を表現しているようです。空に浮かんだ雲を見ていると吸い込まれていきそうな感覚になりました。

作者のものを見る目と考える力が、とても確かなものだと感じました。

・高田誠記念賞

「いそあし急ぎ足」 みのだ いさむ 箕田 勇

日本では見られなくなった光景ですが、この国の平凡な生活をうまく切り取っています。モノクロにすることによって暮らしぶりや親子の関係がより印象的に表現されています。また、モノクロの調子も丁寧に仕上げられていて、写真の質を高めています。